

いきなりクレイジー・ラブ

Masumi & Tatsuki

桧垣森輪

Moriwa Higaki

termity



エタニティ文庫

目次

いきなりクレイジー・ラブ

5

書き下ろし番外編

HOLIDAY

337

いきなりクレイジー・ラブ

プロローグ

朝の通勤ラッシュで混み合う電車。私のすぐ近くに立つ一人の女性が、一瞬視線をさまよわせる。それから彼女はなにかを堪えるようにぐっと目を閉じて俯いた。顔は青ざめて見えるが、頬だけはほんのりと紅潮している。

そんな彼女を含めた大勢の人々が、電車の規則正しい揺れに合わせて身体を上下に揺らしていた。

やがてカーブがやってきて、電車が一段と大きく揺れる。体勢を崩した彼女は、わずかに目を開けてすぐそばにある手すりにしがみつこうように身体を寄せた。すると、うしろに立つスーツ姿の男も移動し、彼女にピッタリと密着する。

——私は最初、男もよろけて立ち位置を変えたのだと思った。でも、やっぱり気のせいではない。男の左手は、彼女の臀部に向かって不自然に伸びている。

男の微かな動きに合わせて、彼女の身体が小さく跳ねる。耳元に男の吐息がかかり、目が大きく見開かれた。

私は咄嗟にスマホを握り締め、動画を取り始める。

そして男が、ゆっくりとその手をスカートの中へと潜り込ませたところで――

「はい、そこまで」

私は乗客を掻き分けて彼女たちの横へ行き、不埒な手を掴む。次の瞬間、下品な笑みを浮かべていた男の表情が変わった。

「朝から痴漢とは、男の風上に置けないヤツ。恥を知りなさい」

しっかりと握った男の手首を捻り、できるだけ高く持ち上げる。

百七センチの身長に剣道でならした腕を持つ私は、大して鍛えてなさそうな男を捕まえるなんてわけない。

「え……、痴漢？」

気配に気づいた周囲が徐々に騒がしくなってきた。先ほどまでこの男に痴漢行為を受けていた女性は、涙目になりながらもホッとした表情で事の成り行きを見守っている。

彼女の様子を横目で確認していると、こちらを睨み上げる男が、苦し紛れに大声で叫んだ。

「この……離せ！ 濡れ衣だ、俺はなにもやってない！」

この期に及んでまだシラを切ろうとするとは。男の手首を掴む手とは反対の手で握っていたスマホを、某時代劇の印籠よろしく突きつける。

「見苦しい言い訳は止めなさい。あなたの愚行はしっかりと動画に収めさせてもらいました。大人しく、観念なさい」

男の顔から一気に血の気が引き、その場に力なくへたり込んだ。ちょうどその時、電車が次の駅に着いたので、男の手を引つ張り、被害女性を伴って降りた。

そして二人で男を駅員のところへ連行し、身柄を引き渡したり必要な手続きを行った。

「さて、と。これでひと通りのことは終えたわね」

振り向いて、女性に声をかける。

精神的ダメージは計り知れない。彼女の心情を慮って声をかけたところ、背筋を伸ばし、しゃんとしていた。もう少し付き添っていたほうがいいかと思ったが、これならば大丈夫そうだと。

「あの、ありがとうございます！」

そう言って腰を直角に折った彼女の頭を、ねぎらうようにそっと撫でる。

「怖かったですよ？」

ふたたび彼女が顔を上げたとき——その瞳にうつすらとハートマークが浮かんでいるように見えたのは、気のせいだと思いたい。

「あの、お名前をお伺いしても……?」

「ああ。私は、本郷といます」

自らの名を告げ、スーツの胸ポケットに入れていたカードケースから名刺を一枚取り出して渡した。

「本郷、真純さん。匠コンストラクションの主任さん……すごいんですね」

どこか恍惚とした表情で、彼女は受け取った名刺を見つめている。

「主任と言っても大勢いるうちの一人ですよ。それじゃあ、私はお先に」

お礼は無用だと言い、次の電車に乗り込むために彼女と別れる。

私たちの距離が十分に離れた頃、彼女が大声で叫んだ。

「あの……お姉様って呼んで、いいですか!？」

——私の背中に流れる長い髪が大きく揺れるほどにガックリと肩を落としてしまったのは、言うまでもない。

第一話 サムライ、王子に出会う

「——といった具合で、遅刻しました。申し訳ありません」

会社に着いた私は、今朝の出来事について一通りの説明を終え、課長に深く頭を下げた。

ちなみに、去り際に言われたお姉様うんぬんについては話していない。

「うん……まあ、先ほど警察からも同様の連絡は受けたよ。感謝状は断ったんだって？」

「はい。そんなことのために助けただけではありませんし。それより遅刻をしまして、本当に申し訳ありませんでした」

いくら痴漢から女性を助けていたとはいえ、遅刻は遅刻。規律を重んじる体育会系としては、時間に間に合わなかったことが引つかかる。

「いや、まあ……、君のしたことは正しいよ。でも、くれぐれも気をつけなさい」

「以後気をつけます」

もう一度課長に頭を下げてから、ようやく自分のデスクについた。

「真純さん、大丈夫でしたか!？」

それと同時に、後輩の女子たちに取り囲まれる。

「課長からなにか言われたりしませんでしたか？」

心配してくれていたことが伝わってきて、心遣いについて口元が緩む。

「ええ。口頭注意だけでお咎めはなかったわ」

「お咎めなんてあるわけですね！ 女性を痴漢から助けたんでしょ？ お手柄ですよ！」

女の子たちは痴漢撃退の話題に色めき立つ。

「でも、遅刻したのは事実だもの」

「満員電車で毅然と声を上げるなんて……私だったら見て見ぬふりをしちゃうかも」
見て見ぬふりは、考えなかったな……

痴漢に遭っていた彼女を見捨てることは、父親の教えにも反する。

私の父は警察官だったが、子供の頃に他界している。

追跡中の犯人との銃撃戦の末の殉職——というわけではなく、病氣であっけなくこの世を去った。

その父が常々『困っている人がいたら助けてあげなさい』と言っていたので、その教えを守るようにしている。

「困っている女性をほっとけないところが真純さんらしいですよ。さすが、我が社の

誇る二大王子様の一人です！」

キヤーツと盛り上がっているけれど……私は「王子様」なんかではない。本郷真純、二十九歳。大学の建築学科を卒業後、中堅建設会社の匠コンストラクションに入社し、以降八年間、設計部の製図担当の部署にて勤務している。女らしさに欠ける振る舞いはあるかもしれないけど、れっきとした「女性」なのだ。

「仕事ができるし、正義感があって面倒見もいい。こんなに男らしくてかっこいい人、なかなかいませんよ。さすがはサムライ王子と呼ばれるだけありますね！」

「……いや、私、女だから」

断っておくが、外見で男と間違えられたことは一度もない。『見た目だけでも女の子らしくいて』という母の願いから長く伸ばした髪は、耳のうしろの低い位置で結んでいる。この髪型は父の影響もあって剣道をしていたときの名残だ。防具を被るには、この髪型が一番適している。

父が他界したとき、私の弟と妹はまだ小さかった。それまで公務員の妻としてのんびり暮らしていた母は、女手ひとつで三人の子供を養っていくために働きに出ることを余儀なくされたのである。私も学生生活の傍らでそんな母を支えることになった。

『真純は強い子だから——母さんと、弟たちを頼んだぞ』

それが、父から私への最期の言葉でもあった。

やんちゃ盛りの小さい弟と妹相手に、可愛くて優しいお姉ちゃんなどはやっていられない。父亡きあととは仕事で留守がちな母に代わって、私が彼らの世話を焼いた。

『真純ちゃんはしっかりしていて偉いわ』

『真純ちゃんは強いから、一人でも大丈夫だね』

男勝りで正義感が強くて面倒見がいい。おまけに剣道の心得もあり頼りになる。近所の人たちからそう言われてきた私は、職場でも似たような目で見られている。そんな期待に応えたくて己を律し続けていたら、いつしかポーカーフェイスが標準仕様になってしまった。

そんな私のことを女子社員たちは——「サムライ王子」と呼ぶようになった。

「男とか女とか関係ないです！ 真純さんを毎日傍で見ているお陰で私たちの男性を見る目は厳しくなってます！ ああ、婚期が遅れたらどうしよう？」

彼女たちの何気ない言葉に、わずかながらも笑顔が引きつる。

婚期の遅れを真に気にするべきは、私のほうなのよ——！?

男性社員に交じって仕事に没頭してきた私。そのせいか、周囲の皆は私を男性に興味のない人間だと思いついでいる。

男社会という建設業界のイメージのせいかな、うちの会社では男性社員に比べて女性社員の比率が圧倒的に低い。それは、女性にとって出会いのチャンスが多い職場とも言え

る。同期たちは、年を重ねるごとに次々と姿を消していった。社内恋愛を成就させた者もいれば、取引先の人と運命の出会いを果たした者もいる。気がつけば、現役で独身を貫いているのは私だけ。しかも、主任という役職をもらい、ますます仕事に没頭した結果、恋愛からは遠ざかるばかり。

——こういうのを、世間では「お局様」と呼ぶのだろう。

「でも、真純さん以上に素敵な男性なんてそうそういないものね。真純さんは十分に自立した女性だから一人でも大丈夫だし、私たちみたいに焦らなくていいですよね？」

「そ、そうね……」

——そんなの、ちっともいいわけがない！

本当は私、寿退社がしたいのよ……！

私だって、結婚して出産して母になって、幸せな家庭を築きたい。それに、今まで何人の友人や同僚にご祝儀を渡してきたと思ってる!? 出すだけ出して回収できないなんて、そんなもつたいたいことがあるか！

父がいないことで、我が家は決して裕福ではなかった。粗末な食事や衣服で毎日を過ごしたというわけではないけれど、娯楽や贅沢なんかはできなかった。休日に弟たちを相手に戦いごっこやおままごとに興じるのも悪くはなかったが、それでも家族旅行に出かける友人たちを、いつも羨ましく思っていた。

だから、いつかは私も家庭を持って、夫や子供たちとの時間を大切に過ごしたい。最低でも子供二人。できれば男の子と女の子を一人ずつ。庭付きの一軒家で犬を飼い、休日には散歩がてら家族揃って公園にピクニックに行つてバドミントンやサッカーを楽しむ、市が運営するようなファミリースポーツ大会にも出たりする、健全かつアクティブなスポーツ一家を目指したい。

——でもそれ以前に、まずは素敵な男性と、素敵な恋愛をしてみたいの！

それというのも、二十九歳という年齢は、イコール彼氏がない歴でもある。

ちなみに私の理想は、警察官として剣道の他に柔道も嗜んでいた父のような、筋骨隆々とした、いわゆるガチマッチョと呼ばれるタイプ。筋肉は常にまとっていられる最高の鍛えだ。鍛え上げられた肉体は男性らしさを象徴し、守ってもらえる安心感がある。それに、己の身体とストイックに向き合った証でもあり、精神力の強さだって証明している。

これまでの人生で、そういう相手に出会う機会がなかったわけではない。だけど、なんと口下手なことに加え、ずっと恋愛を二の次にしてきたつけが回ってきている。学生時代は学業と剣道と弟たちの世話とアルバイトに明け暮れ、就職してからは仕事に没頭し、

この年になるまで恋愛を疎かにしてきた。なんとも思っていない相手には平然と振る

舞えるのに、好みの男性の前だと緊張から固まってしまふ。それがまた余計に可愛げのない姿に見えるのだと、自覚はしていた。

でも、どうすることもできない。それに私は男性の庇護欲をそそる、か弱い女性なんかじゃない。

可愛い後輩を守るためなら男性社員にも立ち向かい、痴漢だって撃退する。だから、大抵の男は私の強さを目の当たりにすると蜘蛛の子を散らすように去って行く。

その結果、もうすぐ二十代の終わりを告げる誕生日が近づいているというのに、私はいまだに恋愛経験ゼロなのである。

いくら晩婚化が進んでいるとはいえ、経験値なしの三十路となれば、結婚できる確率はぐんと減るだろう。そんな状況でこれから相手を探さなければいけない現実に、焦っていた。

——だって、このままでは私、未婚女性界のラスト・サムライになってしまふ……！
そんなことを内心叫びながら俯いた私の傍に、一つの人影が近づいてきた。

「えー？ 一人でも大丈夫だなんて、そんなのあるわけないでしょう？」

甲高い声に交じって響く、男性の声。

ふと顔を上げると、スーツ姿の男が立っていた。

年齢に似つかわしくない高そうな細身のスーツに、やや派手目なネクタイ。だけど悔しいかな、華やかな印象が彼の感じには合っている。

「本郷さんだつて女の子なんだから、勝手に決めつけちゃダメですよ？」

彼は、自らの左右に立つ女子たちの肩に腕を回すと、顔を覗き込んで「ねえ？」と同意を求める。

至近距離で目と目が合った子は真っ赤になって固まり、もう片方の子も、やはり顔を赤らめながら口元を手で覆う。

それ以外の子たちは——

「キヤーツ！ き、如月さん!？」

黄色い悲鳴を上げていた。

悲鳴を上げさせた張本人はといえば、名前を叫んだ女子に向かって平然と「はい、如月ですよ？」などと呑気に挨拶する余裕っぷりだ。

如月達貴——入社四年目の彼は、我が社の営業部のエースと呼ばれる若手の有望株。

営業成績トップの実績はもとより、百九十センチ近くはあろう長身にすらりと伸びた手足と、アイドルのような甘いルックス。常に笑顔を絶やさず、上には可愛がられ下には慕われて社内でも人気ナンバーワンを誇っていた。ついでに言うところ、私が「サムライ王子」と呼ばれているのに対して彼は「正統派王子」と呼ばれている。

如月くんのは、彼が営業成績で頭角を現し始めた二年くらい前から知っていた。だからといって他部署の彼との関わりは薄い。社員食堂などで、若い女子社員たちに囲まれているのをたまに見かける程度だ。如月くんにはいつも、受付や総務課のお化粧の派手な女の子たちの取り巻きがいた。

そんな彼の登場に、うちの女子たちが色めき立つのも無理はない。

「き、き、如月さん、どうしてここに……?」

肩に手を置かれた女の子が、真つ赤な顔をして狼狽えている。

そんな彼女の顔を見ていて、はたと気づく——今は勤務時間だ。

ついうっかり彼女たちと雑談してしまつたが、一歩引いて周囲をよく見てみれば、すでに仕事に取りかかっている同僚たち——特に男性社員が、冷やかな目をこちらに向けていた。

「皆、お喋りはこれくらいにして自分の仕事に取りかかりましょう」

このままではいけないと、剣道で鍛えた鋭い声で場の空気を一気に緊張させる。

「これだから女は……」と男性社員に小言をもらわないうる早めに待ったをかけるのも、お局様の私の重要な役目だ。

女だから、という下らない理由で差別されないために重要なのは、仕事に対する真面目な姿勢。

私の一喝に後輩たちは心得たもので、すぐさま軽い会釈とともに己が席へと散っていく。

——他部署の、一人を除いては。

「えー? 本郷さんだって、ついさっきまでお喋りしてたじゃないですか? せっかくなんだから、もう少し俺と話をしてくださいよ」

「雑談の時間は終わったのよ」

ただでさえ遅刻によって時間をロスしているのに、これ以上の遅れはよくない。彼の存在は無視して、すぐさまデスクの上に資料を並べ作業に取りかかる。

「これが、本郷さんが今手がけている案件ですね? 工程でいうと、六割つてところかな」

彼は相変わらず私のデスクの隣に立ち続け、興味深そうにパソコンを覗き込んできた。「ここまですれば、あとは他の人に引き継いでも大丈夫そうですね」

よくわからないことを呟きながら、大事な資料をひよいと持ち上げた。

「ちよつと、邪魔しないでくれる?」

無視を決め込んでいたのだけれど、目を通して資料を取り上げられては、さすがに反応せざるを得ない。取り返すために伸ばした手は、彼がさらに高い位置までプリントを上げたことで空を切った。

キツと睨み付けた先で、如月くんが人のよさそうな……いや、そう見せかけて裏がありそうな笑みを浮かべている。

「そんな目を向けられたら怖いですよ？　しっかし、製図の作業ってずっとパソコンと資料との睨めっこなんですね。そんなんだから目つきが険しくなっちゃうんですよ？」

「……ほっといてよ」

つり目で目つきが悪いのは生まれつきだ。目元に遮るものがあれば少しは印象が和らぐのではないかと仕事中は眼鏡をかけているものの、それが逆にクールできつい印象を与えると言われることもある。

「でも、本郷さんって眼鏡を外して髪型を変えたら雰囲気ガラッと変わりそうですね？　メイク次第では随分と化けそうな気がするな。まあ、今のままでも知的な美人さんって感じで嫌いじゃないですけど」

大して面白くもない話題でクスクスと笑っている相手に、イラッとした。

——この男、私を馬鹿にしている？

もしも私がまだ二十歳そこそこの小娘だったならば浮かれるのかもしれないが、今のは嫌みにしか聞こえない。

三十路手前のお局様を相手に喧嘩を売るとは、いい度胸をしている。

そんなことを考えているうちに資料をデスクに戻した彼の指が私の眼鏡へと伸びてき

たので、瞬時にパシンと払いのけた。

「……そもそも、どうして営業部の君が設計部にいるの？」

部署の中で話をしているのは私たちだけで、その他にはマウスを動かす音や、キーボードを叩く音くらいしかしていない。設計の部署というのは元々皆が無口で静かな場所なのだ。

そんなところに、べらべらと口ばかり動かす営業の男がいるのは不似合いだ。仕事の打ち合わせで来たであろうことは察しがつくものの、こんなところで油を売ってないで担当者に出たらどうなのか。

それなのにこの男ときたら、動じず笑みを浮かべて叩かれた手を大袈裟にさすっている。

「ひどいなあ、仕事で来たに決まってるじゃないですか」

「それはわかっているけど、さっさと用事を済ませて自分の部署に戻りなさい」

「だから、用を果たすためにここで待ってるんじゃないですか。本郷さんもそれ、切り上げてくださいよ」

大事な仕事をそれ呼ばわりされて、さすがの私もカチンときた。

「どうして、私の仕事を他の者に引き継がないといけないの？」

この男と話していると、なんだか妙にイライラする。気が散るからどこかに行けと

言っているのに、一向に理解する様子もなければなにが言いたいのかも要領を得ない。

——やっぱり、私を馬鹿にしている？

だったら面白い。その喧嘩、買ってやろうじゃない。

いよいよ立ち上がって一戦交えようかというとき、恰幅のよい中年男性たちがフロアに入ってきた。

「やあ、如月くん。お待たせして悪かったね」

「おはようございます、部長。全然待っていませんのでお構いなく」

「部長……」

そこにいたのは、我が設計部の部長と、営業部の部長。二人は睨み合う私たちに向かって、ほう、と感嘆の声を上げた。

「如月くんはもう本郷くんに挨拶していたのかい？ さすがに仕事が早いね」

「はい。もう準備万端ですよ」

私たち二人の顔を見ながらにこにこしている部長たちに、如月くんも満面の笑みで応える。

わけがわからないのは私だけのようだ。

「あの、部長？ 何のことでしょうか？」

「ああ、本郷くんには仕事の説明がまだだったね。実は——」

「は……？」

——それは、突然のビッグチャンスだった。

数年後、首都圏で開催される大規模な国際スポーツ大会。それに合わせて競技場の建設が開始されるのだが、我が社もそのコンペに参加することが、先日の役員会にて正式に決定した。

「担当者として、営業部から如月くん、そして設計部から本郷くんに携わってもらいたい。これは我が社にとって社運を賭けた一大プロジェクトだ。大変だろうが、引き受けてもらえるね？」

「……っ、光栄です」

名譽な仕事に、歓喜するとともに身が引きしまった。

ようやく、念願が叶うかもしれない……！

世界規模の祭典で使うような、大きな会場の建設に携わるといのが、この仕事を始めたときからの私の夢だった。

入社八年目にしてようやく巡ってきたチャンスに心が躍る。だが同時に、疑問も浮かんだ。

「でも、どうして私なんでしょうか……？」

営業の彼はともかく、なぜ表舞台での経験の少ない自分が担当に選ばれたのだろうか。すると、部長の口から驚くべき事実が伝えられた。

「それは、如月くんの推薦なんだよ」

咄嗟に如月くんに顔を向けると、彼はやはり笑顔のまま私を見下ろしていた。

「僕には今回売り込むべき我が社の技術に関する知識が不足していますからね。だからこそ補佐役が必要なんです。それで、実績もあって信頼もおける本郷さんを推薦したんですよ」

確かに、実務レベルの話であれば、彼よりも私のほうが経験がある。

——だが、釈然としない部分も多い。

これまでに彼と仕事で関わった覚えはなく、信頼に足りるようなやりとりをした覚えがないのだ。それに、実績というのは、要するにベテランということだろうが、私よりも経験値の高い男性社員だって大勢いる。

なのに、どうして私なのか……？

それでも、自分の夢と不信感を天秤にかけた結果、私の選択肢はひとつしかなかった。

「わかりました。精一杯努めさせていただきます」

彼に対する不信感があっても、背に腹はかえられない。

こうして如月くんと、波乱の日々が幕を開けたのである。

私の勤める匠コンストラクションは、数ある建設業界の中でも体育館や博物館などを主に扱う中堅の建設会社だ。そのため、国際スポーツ大会の会場となる競技場もお手の物と言いたいところだけれど、今回のような大規模事業の入札に参加するには、それ相應の会社規模や実績が求められる。従ってうちのような中小企業には参加する権利すら与えられない。

「当然と言えば当然ですよね。何百億といった自社の資本金を軽く超える工事を受注して、万が一のことがあっても賠償できませんから。今回の話も、当然元請けは他にあります。うちは、その内の一社である日本トップクラスのゼネコン朋興建設が行うコンペに勝ち、下請けとして事業に参加しようってことです」

電撃的な大抜擢から数日。私は如月くんと一緒に電車で揺られ、元請け会社へと向かっていった。

ゼネコンとは、総合建設業者のことを言う。発注者から工事を請け負い、専門工業者をマネジメントして工事の施工を監督するのだ。実際に建物を建てていくのはサブコンと呼ばれる専門業者たちになる。

営業知識のない私のために、パートナーとなった如月くんは仕事の内容とおおまかな流れをレクチャーしてくれる。

「今回の事業を通しての俺たちの目標は匠コンストラクションを朋興建設のサブコンに組み込んでもらうこと。そのために、まずは顔と名前を覚えてもらうべく、自分たちをアピールする……あ、チョコ食べます?」

「いらない」

——電車の中でチョコを食べるとか、子供か?!

そういうわけで、私と如月くんは、朋興建設に挨拶へと向かっているとところである。

「でも、車じゃなくてよかったですか? 俺、免許を持ってますよ?」

「電車のほうが早いからよ」

車ではなく電車を選択したのは、如月くんの運転技術に疑問を抱いていたというわけではなく、単純に移動時間が早いから。

それに、午後の車内は朝に比べれば余裕がある。車窓の近くで景色でも眺めていれば、気のない後輩との道中でも少しは気が紛れるというものだ。

改めて隣に立ってみると、百七センチの私よりもゆうに高い彼の身長は周囲よりも抜きん出ていた。背筋もスツと伸びているから、立ち姿も様になっっている。

「そんなに時間を切り詰めなくとも、今日は挨拶だけなんですけどね。駐車場だって、あちらさんは自社ビルだから探す必要もないのに」

「この件に関して急いでいるわけじゃないわ。なるべく早く戻って、抱えている他の仕事を今日中には終わらせたいの」

完成までにあともう一息のところまできている仕事がある。如月くんとの案件を抱えながらこの仕事を私が仕上げるには若干のペースアップが必要なため、少しでも時間を切り詰めておきたい。

「引き継ぎしないんですか? あの仕事よりこっちのほうがでかい案件なんですよ?」

「仕事に大きいも小さいもないわ。それに、あと少しだから最後までやり切りたいの」

私の所属する設計部製図課は通称「図面屋」と呼ばれ、設計士がデザインした建築デザインをより精密に製図していく作業を担当している。

建物をひとつ建てるのに必要な設計図は数十枚から場合によっては数百枚単位にまで及ぶ。同じ場所であっても、見る角度を変えたり拡大したりとその都度図面が必要になるからだ。

私は仕事の正確性と仕上がりの早さを買われ、お陰様で取引先から好評をいただいている。自分のことを信頼して任せてくれた案件を、他の人に任せるのは気が進まなかった。

「だからといって、こっちの仕事に手を抜くこともないから安心して」

なにしろ、このプロジェクトには自分の夢がかかっている。

「本郷さんが手を抜くなんて考えてませんけどね。俺としては、車の中で二人きりで

じつくりと親睦を深めたかっただけなんですけど。……あ、もしかして俺と二人きりになるのが嫌だったとか!？」

人が真面目に話しているのに、如月くんのは軽い。

「……それもあるかもね」

「ひどいなあ。パートナーなんだから、もっとお互いのことを知ったほうがいいと思いません?」

「思わない」

「そんな冷たいこと言わないでくださいよー。一緒に仕事をするんなら人間関係も円満なほうが絶対にいいですって」

それはそうだけれども、第一印象が好ましくなかったこともあり、どうしても彼に対しては苦手意識が先行してしまっ

だが、如月くんはどんなに私が怪訝な顔をしていてもまったく気にする様子はなく、子犬のように澄んだ瞳をまっすぐ向けてくる。

「それは……そうね」

諦めのため息を吐きながら言ったのに、如月くんはそれを了承と捉えたようで顔を輝かせた。

「ね、本郷さんはどうして建設業界に入ったんですか?」

「それは――」

私が建設の道を志したのは、幼い頃から習っていた剣道にルールがある。

片親となつて経済的負担が大きい中でも高校卒業まで続けていたのは、父親の影響や心身の鍛練のためだけではない。

一歩足を踏み入れただけで自然と背筋が伸びる、剣道場の、あの独特な雰囲気が好きだった。

特に、大きな試合で使用される武道場の中には有名建築家がデザインしたものもあり、私はその建物に魅せられた。デザイン性の高い外観はもとより、高い天井に美しい模様を描く梁も壮観だ。

それらは不思議と私に安心感を与えてくれた。

試合前の緊張した気持ちや、勝ったときの嬉しさ、負けたときの悔しさ……

その時々自分の気持ち次第で、見上げた天井はいつも違う顔を見せた。

「大学進学を機に剣道は引退したけれど、いつか自分でそういった施設を建ててみたいと思つたの。だから、建築学科に進んだのよ」

「へえ、そうなんです。自分で設計してみたいとは思わなかったんですか?」

「そりゃ、最初のうちは思つていたわよ。でも今の仕事で、思いのほか自分の気質と合つていたみたい」

設計のイロハを覚えるためにと入社当初に配属された今の部署だったが、図面と向き合い細かい計算をしてコツコツと組み立てていく地道な作業は性に合っていた。節約と計算は、幼い頃から身につけているのだ。

それに、納期が迫れば残業続きで時には徹夜もある体育会系な職場は、まさに自分にはうってつけだった。

そんなことをしていたから、気がつけば女子では一番の古株になっていたのだけれど……

「本郷さんって、長女気質ですよね」

黙って話を聞いていた如月くんが急に小さく微笑む。

「真面目でしっかりしていて、お姉ちゃんって感じ。本郷さんがいつも凜としているのは、剣道を習っていたからなんでしょうね」

凜としているというのは褒め言葉なのかもしれないが、融通の利かないストイックな侍という見方もある。

この性格から、妹キャラだと思われたことは一度もない。お姉ちゃんならまだよくて、男らしいと言われることは最早、日常茶飯事だ。

本郷に、生まれてくる性別を間違えたのかもしれない……

「でも、いくら武道の心得があるからといっても、痴漢と戦うのはほどほどにしてください」

「さいね」

ふいに、如月くんの声が低くなる。

これまでとは違うトーンに少し驚いて顔を上げると、彼は意外なほど真面目な顔をしていた。

「……どうして？」

もしもあのとき自分が助けなければ、被害を受けていた女性は一生消えない心の傷を負っただろう。それに、目の前で犯行が行われているのに見て見ぬふりをするのは、自分も荷担したのと同じじゃないのか。

私はキツと睨みつけたが、如月くんには怯む気配はなかった。

それどころか、まっすぐに向けられた真摯な表情に心臓が大きくトクンと音を立てた。「だって、本郷さんが危険な目に遭う可能性だってあるじゃないですか」

心地よい低音が耳に響いて、目の前が大きく揺らぐ。

それは、気のせいではなく物理的に、だ。

次の駅が近づいたため電車の速度がゆっくりになって、よろけたのである。

次の瞬間。身体が、力強い腕に支えられた。

「ちよ、ちよっと……」

突然の出来事に動揺しているせいで声が上がらずってしまう。

——これって、抱き締められているようなものじゃない!?
 彼はふらついた私を支えただけであって、今も他の乗客の邪魔にならないように身を寄せているに過ぎない。けれど、男性に免疫がない私は極度に緊張してしまおう。期せずして如月くんのスーツの胸元に添えてしまった両手。

彼の胸板は、意外にも硬く引き締まっている。

簡単にふらついてしまった私とは違って、如月くんは衝撃にも微動だにしないかった。

華奢だと思っていた身体は、体幹がしっかりとしている。それに、腰に回された腕だつて筋肉質で……って、私つたら、なにを考えてるの!?

「いい加減、離れなさいよ」

いつの間にか電車は動き出して、私たちの周囲には大人二人が立つのに十分なスペースが確保されていた。目の前の身体を押しつけようとするものの、これがまたビクともしない。

——ふいに、頭頂部になかが触れた。

「痴漢と戦って、あなたにもしものことがあつたら、どうするんですか?」

彼の言葉に合わせるように、頭に吐息がかかる。

多分、私の頭に触れているのは、如月くんの唇だ……

私のように身長の高い女性は、男の人に頭のとっぺんを見られることは滅多にない。

まして頭にキスされるなんて初めてのことで、動揺するのもおかしくはないだろう。

ただでさえドキドキとうるさい心臓に、如月くんはさらに追い打ちをかける。

「どんなに強くても……本郷さんは女の子なんですよ?」

甘いささやきに、不覚にも胸の奥がキュンと疼いてしまった。

——この男、天然ものの王子だ!

どんな女性に対しても紳士的で優しい言葉が自然と出てくるなんて、生粋の王子以外にあり得ない。

「お……女の子って、私はもうすぐ三十になるんだけどね?」

彼の発言に不覚にもときめいてしまったけど、私はいい年をした大人だ。ちよつとくらしい女扱いされたからといって、目に見えて狼狽えるわけにはいかない。

それに、からかわれているのかもしれない……

無駄にジタバタと抵抗するのを止めたら、如月くんの腕からも力が抜けていく。緩んだ腕にゆつくりと手を当て押すと、簡単に身体から離れられた。

「それに、私より強い男なんてそうそういないのよ? 如月くんなんて、身体も細いし喧嘩も弱そうじゃないの」

「そうですか? こう見えて、格闘技とかも習ってるんですけどね」

下げた両腕を腰に当てて、如月くんがポーズを取る。それは往年のプロレスラーのよ

うな格好で、つい口元が綻ほころんでしまった。

だってやつぱり、ちっとも強そうには見えない。

「ずっと好きな人がいて、その人のタイプは強い男だと聞いたんで、鍛きたえてるんです」

「へえ……」

私は如月くんのファンでもなんでもないから、彼に想い人がいると知ってもショックなんて受けるはずがない。

なのに、さっきまで高鳴っていた胸の鼓動が急速に静まっていく。

——好きな女の子、いるんだ……

社内の子の人気を集めている彼だけけれど、これまでに浮いた噂を耳にしたことはなかった。それに、社内外問わずモテるであろう彼が、好きな女性を振り向かせるために身体を鍛えているというのも、意外な話だ。

「格闘技って、どんな？」

恋愛話に首を突っ込む気にはなれなくて、特に興味もない格闘技の種類について聞いてみた。

「一応剣道も習ったけど、一番力を入れてたのは居合いかな？ あとは、空手、柔道、合気道、ジークンドー、混合格闘技とか、いろいろと」

すると、出るわ出るわ。しかも後半は聞いたこともない格闘技ばかりだ。

「……なんだか、珍しいものもあるわね」

「まあ、スポーツというより護身術というか、実戦的なものが多かったから——」

そこまで言うと、如月くんは急にぶいとよそを向いてしまった。

……はて。実戦的とは、なにかと戦うことでもあったのか？

もしかすると学生時代はいじめられっ子で、いじめっ子と戦うために格闘技を習っていたのだろうか。

あまりそういうタイプには見えないが、人は見た目によらないとも言うし、なんとなくこれ以上は立ち入ってはいけないような気もする。

急に黙り込んでしまった彼のことを、車窓越しにじっと見つめた。

黒目がちな彼の瞳はガラス越しでも存在感を放つ。時折額を覆う前髪をふわりと掻かき上げる仕草なんかは様さまになっていて、さすがに王子と称されるだけのことはある。

年下らしくあどけないかと思ったら、不意に男らしさを感じさせたり、急に無口になつたりで、なんだか掴つかみどころがない。

さっきは一瞬ドキッとさせられたけど、彼を男性として意識することはないだろう。

入社四年目の彼は、ちょうど自分の弟と同じ年。だから絶対に如月くんを好きになることはないと思うのだけど……ほんのわずかな時間で色々な面を見てしまった私は、少しだけ彼に興味を持ち始めていた。

この不思議な感情の正体はなんだろうか。よくわからないものの、深追いする気もない。

その後、目的の駅に着くまで、私たちは無言のまま電車で揺られた。

電車を降りた私たちは、朋興建設の本社ビルの前へとたどり着いた。

日本有数のゼネコンだけあり、地上三十階建ての自社ビルはなかなかの存在感だ。いざ目の前になると迫力がある。

この胸の高揚感こつようかんは剣道の試合前に似ている。私はこんなに大手の会社を訪問するなどほぼ初めてで、実のところ、緊張していた。

一階の受付でアポイントメントを伝えると、そのままロビーの応接セットへと通された。

担当者待つ間に、如月くんが口を開く。

「朋興の責任者さんとうちになにか繋つながりがないかと調べたら、その人と本郷さんって偶然にも同じ大学だったんですよ」

「……なるほど、それもあって私を指名したのね」

この業界は妙に体育会系などころがあつて、縦の繋つながりや同族意識が強い。同じ大学出身というのは話のきっかけになりやすく、貴重な武器だ。

「でも、同じ大学だからといって知り合いとは限らないわよ？」

「とりあえず顔と名前を覚えてもらうきっかけになればいいですよ。でも、念のため……責任者は三枝晃みぎみさとく司しって人なんですけど、知ってます？」

「え、三枝先輩……!?!」

久しぶりに聞くその名前に、ついつい声が大きくなった。

「……知り合いませんか？」

「同じゼミの先輩なの。私より五つ年上だから顔を合わせることは少なかったけど、院生だった先輩がよく教授のアシスタントをしていたから。ただ、向こうが私を知っているかどうかはわからないけれど……」

三枝先輩は、なにを隠そう大学時代に憧あこがれていた人だ。

だから私は三枝先輩のことをよく知っている。

アメフト部に所属していて、よく鍛きたえられた筋肉に高身長。日焼けした肌から覗のぞく白い歯はが爽さわやかで、スポーツマンの王道を行く風貌ふうぼうはとにかく目を惹ひいた。

分厚い胸板むすね、太い二の腕、逆三角形のフォーム——男らしくて逞たくましい先輩は、まさに私の理想にドンピシャだった。

夢だった仕事に、憧れの先輩。——これは、ついに私にも運が巡ってきた!?!

私の反応に如月くんの眉まゆがひそめられたのだけれど、予期せぬ再会に浮かれていた私

は、さして気に留めていなかった。

「まさか本当に知り合いだったとは、想定外……」
 彼が小さく呟いたとき、ロビーの向こう側にあるエレベーターから、一際体格のいい男性が降りてきた。

「——あつ」

私たちの姿を見つけた男性は、スポーツマンらしく小走りでこちらに駆け寄ってくる。その一歩一歩が、私にはまるでスローモーションのように見えた。

「匠コンストラクションの如月さんですか？ お待たせして申し訳ありません」
 色黒の肌に白い歯を輝かせながらやって来た男性から発せられたのは、聞き覚えのある声。

ああ、間違いなく、三枝先輩だ……！

あの頃はラフなTシャツやポロシャツ姿だったのが、すっかりスーツが板についている。だけど、日焼けした肌や、ワイシャツのボタンがはち切れんばかりの分厚い筋肉は当時のままで。

久しぶりに会う懂れの人は、昔に比べてさらにどストライクな見た目になっていた。年齢を重ねたことで男の深みが増している。パワー溢れる二十代とはまた違った、大人の色気を醸し出していた。

「お忙しいところをおそれいます、匠コンストラクションの如月です」

如月くんがスーツの胸ポケットから名刺入れを取り出すのを見て、慌てて私もそれに倣う。

「ほ、本郷です、よろしくお願いします……」

「ご丁寧ありがとうございます。担当の三枝です」

先輩はにつこりと微笑みながら私の名刺を受け取った。その先輩が不思議そうに尋ねる。「私の顔に、なにかついていますか？」

「あつ、いえ、失礼しました」

——いけない、つい見入ってしまった！

急いで先輩の顔から目を逸らし、先ほど交換した先輩の名刺に視線を落とす。

肩書きは課長。一流大学出身者がひしめく大手ゼネコンにおいて、なかなかの出世だと思われる。強靱な肉体に加え収入も安定しており、社会的地位もあるなんてすごい。三十歳を目前にして、懂れの相手と再会できた感動に、その後の社交辞令的なやりとりは私の耳を上滑りしていくだけだった。

「本郷さんって、ああいうのがいいんですか？」

帰り道、どことなくテンションの下がった如月くんに問いかけられた。

あれほど早く帰って残りの仕事を片付けたいと思っていたのに、今はこのビルを出るのに名残惜しささえ感じている。あちらは大手のゼネコンの営業で、ビッグプロジェクトを抱えるエリートなのだから、打ち合わせ時間が限られてしまうのは致し方ないのに。「あの人は本郷さんになんの反応もしませんでしたけど」

「仕方ないわよ……」

私の名前を聞いても顔を見ても、残念ながら先輩は私を覚えてはいなかった。私と先輩の繋がり（つなぎ）を期待していたはずの如月くんも、会話の中で一度もそのことに触れなかったのは、微妙な空気を感じ取ったからに違いない。

それもそのはず。だって、先輩と会話らしい会話をしたのは、今日が初めてだったのだから。

先輩に憧れて（あこが）はいたが、アプローチをしたことはない。剣道の対戦相手と向き合う心構えは持っているけれど、好意を抱いた相手とどう接していいのかはまるでわからないのだ。

道場の仲間やただのクラスメイト、職場の同僚という関係であれば男女分け隔てなくコミュニケーションもとれるのに、そこに恋愛感情が絡んだだけで途端（とたん）にダメになってしまう。これこそが、私が今まで誰ともお付き合いできなかった最大の要因だろう。

一方的に見つめるだけで、話しかけることなんてできなかった。

それが、今になって再会できるなんて——

「ふーん。俺には脳筋（のうきん）ゴリラにしか見えませんでしたけどね」

「……っな」

——ゴ、ゴリラ、だと!?

人の理想の相手に向かってなんてことを言うんだ。許せん！

振り返ると、如月くんは両手を頭のうしろで組んで、だるそうに歩いている。

「素敵な男性だったじゃない。社会的地位もあるし、君よりよっぽど頼りがいがあるように見えたけどね」

「えー、だから俺、鍛えてますって。なんなら脱いでみせましょうか？」

「脱がなくてよろしい！ そもそも君はまず、その軟派（なまは）な態度をどうにかしなさい」

ジャケットに手をかけて本当に脱（い）ごうとする彼を一喝（いっかく）して、これ以上構うものかと歩調（いっさう）を上げる。

「でもこれ、わざとなんです。可愛い弟キャラのほうが、お姉ちゃん気質の本郷さんには親しみやすいかと思って」

早足で追いついてきた如月くんが隣にピッタリと並ぶ。

確かに、彼の前では緊張しない。でもそれは親しみやすさからではなくて、如月くんに対して恋愛感情を抱いていないからだ。

「弟には見えなくてもいいけど、社会人としてはどうかと思うわ」
彼の態度は、母や私の前ではわがまま放題の弟を彷彿とさせた。でも、弟だって外ではちゃんと社会人としての顔を持って、立派に会社勤めをしている。
「そうですか……。なんとなく男性が苦手そうに見えたから、同い年の弟さんっぽくしてみたんですけどね」

——はて？ 如月くんとうちの弟が同い年だなんて、話したっけ？
それに今の説明だと、まるで彼は私のためにキャラ作りをしているような口ぶりだけど……

だがそんな疑問を口にする間もなく、話題は次へと移る。

「本郷さんは、男性には社会的地位があるほうがいいんですか？」

「ないよりはね？」

母子家庭出身を舐めるな。有り余るほどの財力までは望まなくとも、お金がなくて苦労するのはできる限り避けたい。

父の死後に苦勞してきた経験は、私の根底にしっかりと根付いている。

「だったら俺にも、まだチャンスはあるかな……？」

——如月くんの声はオフィス街を吹き抜ける風にかき消され、はつきりとは聞き取れなかった。

第二話 夢のような初体験

『はい、本郷です』

電話の向こうから聞こえてきたのは、妹の真奈美の声。受話器を通して聞く彼女の声は母に似てきていて、随分と成長したと改めて実感させられる。

「もしもし？ 私よ」

『あ、お姉ちゃん！』

妹の声がワントーン明るくなった。

八歳下の妹は現在大学四年生。そんな年になってもまだ姉からの連絡に喜ぶのかと思うと嬉しくなって、自然と顔が綻ぶ。

実家には今、母と弟、妹の三人が暮らしている。

私が一人暮らしをすると決めたとき、弟は高校生、妹は中学生で、彼らを残して家を出るのはあまりに忍びなかった。だけど費用や通勤時間を綿密に計算した結果、現在の形が一番ベストという結論に至ったのだ。

『どうしたの？ 電話なんて珍しいね。なにかあった？』

無邪気な妹に、用件を伝えることを一瞬躊躇した。

「実は明日、急な用事が入って帰れなくなつたの」

『えー!』

心底ガツカリしたような声に心が痛む。けれど、これも仕事なのだから仕方がない。

——事の発端は、昨日のことだった。

『は？ パーティー?』

パソコンに向かって一心不乱に図面を入力していた私のもとへ、ふらりと如月くんが現れた。そして彼は手にしていた封筒をこれ見よがしに振りかざした。

『そう。朋興主催のパーティーが来月あるんですけど、そこに三枝氏も来るんです。お近づきになれるものかと画策した結果、潜り込めることになりましたー!』

『……声が大さい』

それはつまり裏でこそそと手を回したということなのに、こんな大々的に発表してどうするつもりだ!?

チラチラとこちらに投げられる同僚たちの視線が気になって、如月くんの腕を掴むと設計部のフロアを出て、同じ階の隅にある自販機コーナーまで引つ張っていった。

自販機と背の高いテーブルがひとつ置かれたスペースには、私たちの他には誰もい

ない。

如月くんは相変わらず黒目がちな瞳をキラキラと輝かせながら、手柄を褒めろと言わんばかりに胸を張り続けている。……犬か、君は?』

『伝手を頼って苦労してゲットしたんですよ? すごいと思いませんか?』

『あー、はい。エライエライ』

一応褒めてやると、如月くんの背後にぶんぶんと左右に揺れる尻尾が見えた。

だが突然、幻覚の尻尾がピタリと止まる。

『でも、ひとつ問題があつて。このパーティー、ドレスコードがあるんですよね。本郷さん、ドレスとか持ってます?』

『持つてるわけないじゃない』

同僚の結婚式のために購入したセレクトスーツの類いならあるが、それ以外は着たこともない。

第一、ドレスなんてキャラじゃない。

——でも、本当は私だってドレスを着てみたい。いつか自分の結婚式では……と密かに憧れている。

キャラ的には白無垢に綿帽子に文金高島田のほうがしっくりきそうだが、ウエディングドレスでお姫様抱っこかされてみたいの……!』

そんなことを考えていると彼は、なぜかパアツと顔を輝かせた。

『ですよね？ だから、一緒に買いに行きましよう！』

『……は？ 今から？』

『嫌だなあ。仕事中に堂々とショッピングなんて、サボりですよ？』

腰に手を当てた如月くんが、サボりはダメだと偉そうに首を振る。

——くっ、なんか調子狂う。

『今度の土曜、予定はありますか？』

如月くんが指定した土曜日は、実家に顔を出すことになっている。

まあ、どうしても帰らなければというわけでもないけど……いや、それよりも。

『買い物はいいとして、どうして君と一緒に出かけなきゃならないの？』

『だって一応パートナーとして同伴するんですから、ちぐはぐな格好をしていたら可笑しいじゃないですか。それに、出席者は朋興を筆頭に一流企業ばかりで、量販店にあるような服ってわけにはいきませんよ。本郷さん、一人で百貨店とか行けます？』

——うっ、なんで私の考えをお見通しなのよ!?

私の買い物の定番は、値段が手頃で良心的なお店。たまに百貨店に足を運ぶことはあっても、身体に染みついた貧乏人根性のためか萎縮してしまふのだ。

そんな私の心情を察してか、如月くんは知り合いの店を紹介してくれるという。

『俺、百貨店に当てがあるんですよ。知り合いだから少しは融通もつけてもらえるし、心強いと思いませんか？』

如月くんの身につけているスーツは、仕立てのよいものばかりだ。営業という仕事柄、身に着けている服や靴などを見られることも多いだろうし、人一倍気を遣っているに違いない。

ならばここは、彼の顔を潰さないためにも、彼の方針に従おう。

郷に入っては郷に従え。ちゃんとしたパーティーに出るのであれば、それなりの格好はしなくてはならない。

『……わかった』

というわけで、私は実家への帰省をキャンセルすることにした。

よくよく考えてみれば、どうして一か月も先の予定の買い物をすぐしなければならぬのか疑問だが、当てを紹介してもらうのだから彼に予定を合わせるべきだ。

『でも……明日は、お姉ちゃんの誕生日なのに』

——そう。明日は、私の三十回目の誕生日である。

『もう祝ってもらうような年でもないから』

弟や妹の誕生日であればながあっても駆けつけるが、さすがに自分の、しかも三十

回目のなんて、嬉しくもなんともない。

だから、今回のことはいきつかけかもしれない。

さすがに三十歳にもなって、家族で誕生日パーティーはちよつと……いや、かなりイタい。

そんな姉の複雑な胸中を知ってか知らずか、突然妹の声すゑこが鋭とくなった。

『ねえ、お姉ちゃん。用事って本当に仕事？ もしかして、デートなんじゃないの？』

『バ、バカな！ そんなわけないでしょう！』

——なにを急に言い出すの！

『えー、そうやって慌てて否定するところが怪あやしいな』

想定外すぎて動揺しただけに、妹は勘かんぐつたようだ。

『本当に、仕事なのよ？ デートなんかじゃないもの……』

仕事を強調したことで、自分で落ち込んでしまっ。

だって、三十歳にもなって、家族しかお祝いしてくれる相手がいらないなんて……空ちやしい。

そんな私に、妹はさらに追い打ちをかける。

『ふーん……まあ、いいや。お姉ちゃんのを中止にするなら、次の私の誕生日も家族で祝うのはやめて、彼氏と過ごしてもいいよね！』

「——は？ か、彼氏!？」

突然の爆弾発言に、落ち込んでいた気持ちが一気に吹き飛ばされた。

「あんた、彼氏がいるの!？ どこの馬の骨よ、お姉ちゃんは聞いてないんだけど!？」

『聞いてなくて当たり前でしょ、言っけないもん。あー、よかった。これで私も堂々とデートできるー!』

家族で計画していた私の誕生日パーティーがキャンセルになって落ち込んでいるかと思つた妹が、語尾に音符おわでもついていそうな勢いで喜んでいる。

「ちよつと、真奈美!？」

『——もしもし、姉貴？ 明日帰ってこねえの?』
いくら呼びかけても返事をしない妹に代わって電話に出たのは、弟だ。

「ま、真弘!？ 真奈美、彼氏がいるの!？」

妹の身に起きている一大事に取り乱す私に対して、電話の向こうの弟から乾いた笑いが聞こえた。

『なんだよ今さら。あいつにだって彼氏の一人や二人くらいいるだろうよ』

「ふ、二人もいるの……!？」

二股なのか慌てふためいていると、弟からは冷静に『いや、同時に付き合ってるわけじゃないから』と突っ込まれた。

「真奈美に彼氏がいるなんて聞いてないんだけど？　どんな男なの!?　ちゃんとしてくれる人なんでしょうね!」

可愛い妹が、海のものとも山のものとも知れない男に捕まったのではないかと考えるだけで背筋が凍りそうだった。

こうなったら、今すぐにでも実家に帰って、どんな相手かしっかり見極めなくては……!」

『そんなに心配しなくても、あいつだってわかってるよ。人のことより、自分の心配したら?』

「なんでそんなに冷静なのよ……はっ、もしかして、あんたも……?」

『それは、ご想像にお任せします』

「ちよつと、真弘!」

思わせぶりの台詞を残して、逃げられてしまった。

電話の向こうでは、楽しそうな弟と妹の笑い声なんかがして……やっぱ買い物なんてキャンセルして、今すぐ実家に帰らなくては!　と思いき直す。

『もしもし、真純ちゃん?　明日デートなんですってえ?』

「お母さん……」

ヒートアップした私の耳に飛び込んできたのは、どこか間の抜けた母の声だった。

立ち読みサンプル はここまで

『真純ちゃんにも、やっという人ができたのねえ。まったく男つ気がないから、本当はちよつとだけ心配してたのよ?　お母さん嬉しいわあ』

この、のんびりおっとりとした話し方。私の母は、私とはまるで逆の性格の人間である。

父と母の馴れ初めも、交番勤務だった父のもとに落とし物や迷子やらでしょっちゅう母が顔を出していたことらしい。迷子って……子供じゃないんだから。どれだけドジっ子なのよ。

そのため父が急逝して母が働きに出ることが決まったときには子供ながらに心配した。

「お母さん、私、デートじゃないから……」

『隠さなくてもいいのよお。真純ちゃんももういい年なんだから、お誕生日くらい好きな人と一緒に過ごさなさいな。お母さんが真純ちゃんの年の頃には、もう真奈美だって生まれていたんだからね』

そう。母は二十歳のときに父と結婚した。……っていうかお父さん、交番に来た相手に手を出すってどうよ?」

知り合ったときはいったいくつだったんだ、なんて質問は怖くてできない。

『それに、真弘や真奈美だってもう子供じゃないんだから、そんなに心配しなくても大